朝まで授業Chuです！

ひきがやもとまち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

綾奈先生がドＭでレズの巨乳教師として鷹羽さんと女子寮で同居生活するお話です。

１８禁ではありませんが１６禁ぐらいにはいくのかもしれません。アホエロ話が苦手な方はお控えください。

尚、優希さんは出てきません。

目次

初夜「差し引きゼロで、間違いがなかったことにすれば誤魔化せるのです」——1
第１夜「そんなことすると私が脱いじゃいます♪」——4
第２夜「いけないいコトした先生のお尻をペンペンされちゃいました♪」——8

初夜「差し引きゼロで、間違いがなかったことにすれば誤魔化せるのです」

「・・・はい？　院長先生、今なんと・・・」
「ですからーー」
　鳳梨学院1年A組の女生徒『鷹羽理沙』は理解できないと、目の前に座る学院長先生に真意を尋ね、眼鏡の院長先生は表情筋一筋動かすことなく冷然と覆せざる結論を返答として返してくれる。
「特待生として入学される事になっていた男子生徒の加賀見優希さんは、この柿之坂先生のミスで女子生徒として女子寮に住むことにされかけてしまっていたのです」
「はぁ・・・」
　だからそれがどうした、私には一切合切金輪際関係ないじゃないの、という本心を包み隠しながら物静かな優良学生としての仮面をかぶった理沙は言葉少なく対応して茶を濁す。
　関わり合いになりたくい。ただその一心のみを理由として。
「幸いなことに修正手続きが間に合うギリギリのところで判明しましたから最悪の事態は免れましたが、やはり柿之坂先生を無罪放免で許せるほどには甘いミスではなかったようでして、学園上層部からの突き上げが激しいのです。早急に適切な処罰を与えないと学園の存続に関わるほどに」
「あの・・・失礼ですけど、そこまで大きいミスを犯された柿野坂先生には辞めていただくのが誰にとっても一番なのではと私などは思うのですが・・・」
「そんな！　あんまりです鷹羽さん！　そんなにも先生のことが嫌いなんですか!?」
　大きすぎる胸をブルン！と揺らしながら涙ながらに訴えかけてくるのは二十代前半の爆乳教師『柿之坂綾奈』先生。
　理沙はクラスを受け持って貰ったことがないため詳しくは知らないのだが、友達に聞いた噂によると、どうやら相当に『エロい先生』と

の事だったので警戒はしていたのだが、
（エロくてバカな先生だったなんて聞いてない！　それになによ、そのバカみたいにデカいサイズの胸は！　それ見てるだけでムカつくんだから定職か退職処分で十分なのよ！）
　超個人的な女の理由により、綾奈先生には1ミリグラムの同情心すら沸いてこない理沙としてはむしろ、学校側の対応の曖昧さの方が気になっていた。
　確かに昔から適当なところの目立つ学校ではあるのだが、ここまでヒドいミスを犯した先生を処分なしとするのに躍起になるほどには狂ってなかったはずなのだが・・・。
「彼女の祖父は県会議員の有力者で、この学校の運営資金の大部分は彼の御仁に賄っていただいている部分が大きいのです。そのお孫さんを「任せる」と言われたからには相応に守って差し上げないと私の将来の天下り先に関わるのです」
「って、コネ採用ですか！　しかも、院長先生までもが！」
　裏切られた！　見た目的にも真面目な方だと思っていたのに！
信じていたのに！
　心の中で地団駄ダンシングを踊り出してる理沙を無視するように視線を外して、院長先生は眼鏡を光らせながら綾奈先生に顔を向けると。
「そう言うわけですので、鷹羽さん。こちらの柿野坂先生の処罰は減給及び問題生徒一人を教育的指導をするため付きっきりでの専属家庭教師としてタダ働きの強制労働を申しつけるつもりでおりますから、後よろしく」
「何がですか!?　そして、どこの誰が問題生徒だとおっしゃる気なのですか!?　もう少し生徒一人一人の個人的意志を尊重しないとですね・・・！」
「嫌なら、あなたを退学処分です。私と学校と学校生徒全員の未来と生活と給金と将来の安定した安楽な天下り先を守るためにも、私は鬼になると決めたのですから」
「もの凄く格好悪い覚悟!?　そ、そうだ！　綾奈先生だって嫌ですよ

ね!?　私みたいな今まであったこともない生徒と四六時中同じ部屋で生活指導なんて・・・！」
「生活指導・・・もし私が恥ずかしさに負けて判断を誤れば、鷹羽さんは問題児として退学・・・やります！　やってみせます！　必ず私が教師として鷹羽さんを正しく教え導いて差し上げます！
　そのためなら私、どんな恥ずかしい格好だって着て見せますし、脱いで見せます！　恥ずかしさに負けたりなんか絶対しません！」
「やっぱりダメだわこの人っ！　お願いだから早く退職してください！　私のためにも今すぐに！」
　学園からの決定事項として言い渡された、柿之坂綾奈先生による鷹羽理沙への専属家庭教師任命処分はこうして即日のうちに実行へと移された。
　それは今まで平穏だった鷹羽理沙の学園生活が桃色に染まる始まりの事件であり、ピンク色した恥色性活がスタートする記念すべき日の記録でもあった。
　全裸とパンツとお尻とおっぱいがイッパイの恥色学園百合ラブコメディーが今幕を開ける！　頑張れ理沙！　パンツを守って恥ずかしいところを見られるな！
　女は度胸！　脱げば脱がぬよりも被害が少ないときもあるぞ？
「結局、見られないで済むのはどっちなのよーーーーっ（＞ｏ＜）!!!!!!!」
　答え：
　どっちも脱がされて終わります。
　脱衣ＥＮＤ確定ストーリーな物語ですから～（＾Ｏ＾）♪
　つづく

第1夜「そんなことすると私が脱いじゃいます♪」

「あの～・・・鷹羽さん？　私のしている、この格好は・・・」
「・・・・・・なんですか？　なにか言いたいことでもあるんですか？
あったら聞いてあげます。聞いてあげるだけですけども」
とりつく島もない調子でぶった切り、部屋の明かりを消した鷹羽理沙はベッドに入って隣で眠る綾奈先生には背中を向ける。完全拒絶姿勢ではあるが、彼女としてはこれでも最大限の譲歩をしているつもりである。
たとえ綾奈先生がパジャマ姿で後ろ手に手錠をかけさせられて、両足首にも同じ物を取り付けられた身動きとれない芋虫みたいな状態でベッドの上に投げ出されたまま放置されていようとも、理沙にとってはこれが譲歩だった。
（私を、あんな恥ずかしい目に遭わせた報いよ報い！　いい気味だわ！　自業自得よ！　そう言うことにしておくわ！
だって、そうでもしないと私の守ってきた貞操概念や倫理観が崩壊寸前なんだもの！）
知恵を持つことで本能を征服したはずの知的生命体『人類』がもつ倫理とか常識とかの文化的知的活動を、本能だけで破壊しまくるエロティックモンスター柿乃坂綾奈。
そんな驚異の生命体と一晩同じ部屋で同衾しなくてはならなくなった己が不幸を嘆きながら、それでも床に寝かせるのは可哀相だからと同じベッドで寝させてあげられるよう最大限の譲歩を考案するあたり鷹羽理沙の本質は良い子にできていた。

「あの～、鷹羽さん？　明日は入学式ですし、早寝早起きは模範的な良い子の生活なので大変よろしいんですけど・・・寝る前にひとつだけ、下世話な質問しちゃってもかまいませんでしょうか？」
「・・・・・・なんですか？」
「両手両足つながれてる体勢で眠らなくちゃならなくなった私は、その・・・・・・おトイレに行きたくなった時とか、どうすればいいい

いんでしょうか？」

イモムシ綾奈先生がちょっとだけ困ったような笑顔で聞いてくる。

確かに今の彼女は（なぜかは知らねど）持参してきた手錠によって、両手を後ろ手に縛られているし、両足はそろえた状態でピンとのばされたままくるぶしで固定されて繋がれている。

這って進むことでトイレまでは行けるかもしれないが、それだけだ。それ以上は行けないし出来ない。

パジャマのズボンは脱げないし、中の下着も降ろせない。そうなると当然ながら・・・生理現象を処理することも不可能なのである。トイレの前でイモムシになりながらお粗相するしか道はない。

さすがの綾奈先生も変態プレイ好きではなかったので、（彼女としては）当然の権利を主張したつもりだったのであるが、主観とは人それぞれであり利害は対立しあうものでもある。

で、結果的に。

「・・・

ZZZZZZZZZZZZZZZZ」

「ちょっ!?　狸寝入り!?　寝たフリで逃げようだなんて卑怯なマネは、先生として許しませんからね鷹羽さん！　私今ちゃんと聞きましたもん！

鷹羽さんご自身の口から『ゼットゼットゼット』っていう効果音をわざわざアルファベット読みで口にすることで先生とのおしゃべりを中断させてしまおうという鷹羽さんの邪悪なたくらみの証拠を、先生はすでに押さえてあるんです！　先生の頭の中に！

さぁ、どうですか!?　難攻不落です！　アルカトラズ級です！　取り出せませんし、奪還できませんよ!?　これを使って不正をただされたくなかったら速やかに先生を拘束している手錠をはずしてください！」

・・・

「あ、あれ？　もしかして本気で寝たフリを続けるおつもりなんじゃあ・・・・・・い、イヤーっ!?　鷹羽さん！　鷹羽さん！　起きてください！起きてください！　どうせ起きてるんですから、本当は起きてるところを私に見せてお話ししてください！
先生が悪かったですから！　ごめんなさいしますから！　悪い子とした罰として、お仕置きお尻ペンペンを喜んで受けさせられちゃいますから！
だからお願いします！　起ーーきーーてーーくーーだーーさーーいーーーっ!!!!
・・・・・・って、あ!?　だ、ダメ・・・。別に行きたかったわけでもないのに、行けないとわかった途端に襲いかかってくる生理現象がいきなりぃぃ・・・・・・っっ。
鷹羽さんお願い！　先生を助けて！　助けてくれたら先生、お礼としては、初めてをあげてもいーーーーー」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ゼットゼットゼットゼットゼット」
「鷹羽さーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっっん!?」
ーーーこうして、名門校として名高い鳳梨学園の夜は更けていく・・・・・・・・・。

ーーーと、言うか。
なぜ、知り合って数時間にも満たない短時間のあいだにアレほど多くのエロハプニングを連発しまくれるのだろう？　もはやわざとやってるとしか思えない。
女の子同士で共同生活するからには恥ずかしさを耐えなくてはならない場面が出てくるから「今の内に慣れておきましょう！」と、スカートのホックに手をかけて教え子の前で下着姿になり、「恥ずかしさを耐えあう特訓」と称して理沙のスカートにまで手を伸ばしてくる。

入浴時には、「生徒と先生が同室で同棲をしているだなんて思われたら鷹羽さんの将来に関わります！　ですからごく自然に見られるよう一緒にお風呂に入りましょう！」などと本末転倒な提案を力強く力説してきて、なし崩し的に一緒に入る羽目になった。

せめて他の生徒たちとカチ合わせしないよう、込み合う時間だけでもズラす工夫をしてみたのだが、よく考えなくても一緒に入らなければすんだ話である。

（・・・あげく、「この学校は女子寮で男の方はいらっしゃいませんし、女性だけで生活しなくてはいけない場所でもあります。共同生活をしていく上でお互いのことをよく知っておかないと色々と不都合なことがあるかもしれませんし・・・」

第2夜「いけないコトした先生のお尻をペンペンされちゃいました♪」

（あー、あー、私にはなんにも聞こえなーい。聞こえないったら聞こえなーい）

背中の方から聞こえてくる騒がしい騒音に、目と耳と心を閉ざすことでスルーしながらも、鷹羽理沙の心はちつに乱れまくっていた。

そもそも、おかしいのである。

（問題行為のある先生の監視役に生徒が選ばれるのは・・・・・百歩、いや、一万億歩譲って妥協してあげてもいいんだけど・・・なんなのよ！　あのハレンチ行為の連続は！

わざとじゃないハプニングだとしても許されるレベルを超えすぎちゃってるでしょーっ!?）

心中で叫び声のような悲鳴をあげながら、鷹羽理沙が思い出すのは今日の昼間に綾奈先生と出会ってから今までの数時間に満たない短時間で起きてきたエロハプニングの数々についてだった。

女の子同士で共同生活するからには恥ずかしさを耐えなくてはならない場面が出てくるから「今の内に慣れておきましょう！」と、スカートのホックに手をかけて教え子の前で下着姿になり、「恥ずかしさを耐えあう特訓」と称して理沙のスカートにまで手を伸ばしてくる。

入浴時には、「生徒と先生が同室で同棲をしているだなんて思われたら鷹羽さんの将来に関わります！　ですからごく自然に見られるよう一緒にお風呂に入りましょう！」などと本末転倒な提案を力強く力説してきて、なし崩し的に一緒に入る羽目になった。

せめて他の生徒たちとカチ合わせしないよう、込み合う時間だけでもズラす工夫をしてみたのだが、よく考えなくても一緒に入らなけれ

ばすんだ話である。
（・・・あげく、「この学校は女子寮で男の方はいらっしゃいませんし、女性だけで生活しなくてはいけない場所でもあります。共同生活をしていく上でお互いのことをよく知っておかないと色々と不都合なことがあるかもしれませんし・・・」――ってぇ、女の子同士で背中の流し合いっこは普通の女子校でもやってないわよ！　あやうく流れで騙されるところだったじゃないの！）
　お風呂場であった百合百合恥ずかしすぎるハプニング内容を思い出してしまいそうになり、理沙はあわてて心の壁の厚さを増した。・・・これでもう安心、ＡＴフィールド並だ。
　安心してゆっくり寝られ・・・る・・・・・・・・・・・。

「すー、すー・・・。う、うぅん・・・・・・・」
「・・・・・・っ!?」
　耳元から色っぽすぎる寝息が聞こえてきたので慌てて瞼と心を開いて後ろを振り返った理沙が見たのは、ドアップにまで迫ってきていた綾奈先生の寝顔シーン。
　・・・少しだけ視線を下におろせば、大きな二つの丸いメロンがそれぞれ別々のタイミングで揺れていて、なんかムカついたから直ぐに視線を先生の顔に戻して固定してしまうことにする。

　・・・元来、寝相が悪い人なんだろうか？　最初の寝てた場所から理沙の方にしなだれかかるように迫ってきている。
　あるいは、お気に入りのぬいぐるみを抱きしめながらじゃないと眠れない癖の持ち主なのかもしれない。
　熊の人形に抱きつくようにして、足を絡ませてこようと動かしながら手錠に阻まれて上手くできないでいる。
（・・・ひょっとして、おトイレに行けるようにして欲しいって言うのは、『ぬいぐるみがないと眠れない』ことを生徒相手に白状するのが恥ずかしかっただけなのかしら・・・？
　だとしたら私も悪いことしちゃったし、た、多少のハレンチさは見

逃してあげるしかないわよね。責任がある身として）
　彼女自身も元来から責任感が強く、委員長気質な気配り屋さんな性格の持ち主なので、「自分のほうが悪いことをしてしまった」と感じたときには色々と寛大になりすぎてしまう悪癖を持っていることに気づいていないものだから、しばらくのあいだ理沙抱きぬいぐるみの代わりとして、眠っている綾奈先生のオモチャになることを教授しようと決意してしまったのである。

　理沙が抵抗しなくなったことを知る由もない睡眠中の綾奈先生は、寝返りを打ちながら理沙との距離をさらに縮めてくると本格的に抱き人形として抱きつくために、塞がっている両手の代わりとして強く強く身体を押しつけてきた。

「ん・・・はぁ・・・あぁ・・・・・・・はぁ～」
（当たってる！　当たってるわよ！　先生のデカすぎるのが私の背中に当たってますから！　ーーーって、嫌みか！　このデカパイ！（、ε、）!!）
　柿乃坂家が熟成させて実らせることに成功させた、天然生搾りバスト９４ｃｍを押しつけられて、その感触を直に背中で味あわされた理沙は、同性であるとは言え余りのデカさに変な気分にされそうになって大いに困り、慌てふためく。

　さらに先生の行為はエスカレートしていく。
「は・・・あ・・・んぅぅ・・・・・・・・・・んんぅっ！」
　こすり上げるように胸を押しつけては戻し、また押しつけては戻しを繰り返していく内に暑苦しくなったのか布団から外へと出ようとし始める。が、両手が塞がったままでは全身が出ることはベッドからでないと無理だし、そうしたらベッドから床へと落ちてしまう。
　仕方のない結果故なのか、綾奈先生は下着一枚しかまとっていない下半身だけでも外に出して、自由を確かめるようにパンツに包まれてるお尻を高く掲げて伸びの代わりにしようとしている。

「・・・ん・・・んぅぅぅーーーーーーーーっっ!!!!」
お尻をバックに突き出したとき、必然的に上半身が前にでる力も増幅される。
強さを増した理沙の背中に押しつけられる力が増したことにより、綾奈先生の放漫なバストを覆っていたパジャマのボタンは摩擦の末に耐えきれなくなって弾け飛ぶ。
そしてーーーー
ぷるるるん♪

まろび出る二つの巨大な双丘。ーーもうコレ、自分のとは違う別の気管かなにかなんじゃないのと思いたくなる、桁外れのデカさ。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
理由もなく理沙は無性に腹がたったので、思わず眠っている相手の胸を鷲掴みにして振り回してやろうかという凶暴な衝動に身を任せたくなってしまう程のデカさなのである。
(・・・落ち着け私。あれは贅肉、脂肪の塊、お肉の塊。あんなのはただの飾りで、殿方と男の子たちにはそれが分からないだけ。私の考えはいつも正しい。ーー胸については特に)
ーー彼女の名誉のためにも説明しておきたいのだが、彼女のも結構大きく８４ｃｍある。小さいわけでは決してない。
・・・ただまぁ、女の子として自分よりデカすぎるのをこれ見よがしに見せつけられると色々と思うところがあるのである。

(ーーそうよ！　すべては巨乳が悪いのよ！　私のは小さくないの！
巨乳がデカすぎるのがいけないだけなんだから！
貧乳が悪だったとしても、私は小さくないから悪くなーーーーーーちょっと!?　いきなり何し始めてるんですか先生!?」
心の声から始まったつぶやきは、最後には黄色い悲鳴として口から外に出しまくられていた。
「ああっ!?　ダメですぅ！　ダメですよぅ！　こんな事は行けませんダメなんですぅぅぅぅっ!!!!!!!!　あ、あははぁぁぁ～っん♪」

なにか怖い夢でも見ているのか、助けを求めるように力強く抱きつこうとしてきて、両手が塞がってるから、胸を全力で押しつけまくってくると言う暴挙に訴えられてしまった理沙の理性は為す術もなく蹂躙されていく！　牛のようにデカすぎる乳によって！

（こ、コレもう私が悪いから責任取ってで我慢できるレベルを越えすぎちゃってるんだけど!?　ダメなの!?　これでもまだ私は我慢しなくちゃいけないの!?　マジでウチ切れする五秒前だったら五時間ぐらい前に過ぎちゃってるんですけどもぉっ!?）

怒りメーターと恥じらいメーターが振り切れる寸前のまま、懸命に決壊を防ぎながら理沙は激しく運命の皮肉と小悪魔のみが成すことのできる悪意ある偶然を呪っていた。

だって、普通だったらあり得ないことだから。

両手を背中で拘束されたまま『パンツ丸出しで』迫ってくることも。

『ノーブラだけどパンツは穿いてる』巨乳教師のパジャマがはじけて剥き出しの胸を押しつけられることも。

どちらも共に、『手錠で両手の自由を奪われたままでは不可能』な神業。

それを眠りながら悪夢にうなされつつでも実行できる人間がいるだなんて、いったいどんな奇跡的確率でおきる悪意ある偶然がーーーーー

「・・・・・ん？　あれ、ちょっと待って。それって、おかしくないですか綾奈先生？」

「あぁ～ん♪　あぁ～ん♪　エッチな悪夢にうなされて先生が生徒に不可抗力で～♪

ーーって、何か言いましたか鷹羽さん？　先生、生徒からの質問はいつでも受け付けますよ♪　・・・はっ!?」

致命的な相違点に（ようやく）気づいた理沙が委員長気質から発作

的に質問を放ってしまい、色ボケだけど先生として生徒に向ける愛情に嘘偽りのない綾奈先生は本能的に答えてしまって、ジト目の理沙と見つめ合う窮地に陥ってしまう。
善人だけど色ボケで、付け加えるならバカだったから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え、えーと・・・・・・。ーーーーあ、あはぁ～ん♪　寝言がぁ～♪　譫言がぁ～♪　夢で見ているエッチな夢の中でしている会話がぁ～♪　現実の先生だったら絶対に言わないようなエッチなワードを連発しちゃってる～♪
だからこれは不可抗力ー♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらくジーッ、と綾奈先生の晒し始めた恥態というか、醜態と言うべきなのか微妙な行動を眺め続けていた鷹羽理沙は、無言のままベッドから立ち上がって『準備を始める』。
私物として自室から持ってきていた色々な道具の詰まった袋ーー先生から絶対にあけちゃダメですからね！と言われている奴ーーへと歩み寄っていって中身をあけて物色し始めた理沙の後ろ姿を薄目をあけて見ていた綾奈先生は、恐怖に顔を引き攣らせていた。
それはダメよ、いけないわ。
それは開けたら世界が混沌に包まれちゃうパンドラな袋であって、先生自身が名付け親として命名した名前だと『いつでもどこでも、入れたり出したりポケット』なんだから絶対に開けてはいけないわ。開けちゃったら世界が滅びちゃったりなんかしちゃうかもしれないんだからね!?

ジャーーーーーーーーッ。

パカッ。

・・・でも、開けちゃった今になって「開けちゃダメだったのに！」なんて言うのは教育者として失格よね。子供は間違いを犯すものな

んだから、先生は子供が間違えたときに叱ってあげて、正しい道に戻れるように説教して上げなくちゃ！
そう決意した綾奈先生は、感情を失って暗い瞳になり、幽霊みたいな足取りでベッドに戻ってきている鷹羽さんをキッ！と厳しい瞳で睨みつけてからキツい口調で叱りつけてあげた！

・・・お尻を高々と上げて、パジャマの上着をほとんど脱ぎ捨てたままノーブラの乳首を理沙の使っていた枕に押しつけながら、自分の持ってきた手錠によって自分自身が両手両足を繋がれている状態で。
先生の背後に立った理沙からは、自分の穿いてるパンツに絵入りのポップ体で描かれているプリント文字がハッキリと読み上げられるような体勢のまま、毅然とした態度で堂々と！
「鷹羽さん！　先生ちゃんと言いましたよね？　その袋は開けちゃダメですよ！って。
それなのに開けちゃうなんてヒドいです！　最低です！　プライバシーをなんだと思ってるんですか!?　人の嫌がることを進んでするだなんて、先生そんな悪い子になるよう育てた覚えはありませんよ!!」

ーーーさて、ここでパンツに書かれている文字を、声に出して読み上げてみようか。

『Ｌｅｔｓ！　ＳＰＡＮＫＩＮＧ!!』

「鷹羽さん！　あなたには女の子としても！　鳳梨学院生の一人としても！
慎み深さが足りていません！　もっと恥じらいを持つようにしなさい！
でないと将来、先生みたいに立派な淑女にはなれませんよ!?」

ブチ。

「アンタにだけは言われたくないわ！　この変態エロボケレズ女教師ーーーーっっ!!」

ぴしいいいいいいいっっん!!!!!

「アハァァァァ～～～～～～～～～ッッン♪　いた～～～～～～～～～っっい♪

生徒にお仕置きされちゃう惨めな先生の屈辱的カイカ～ン♪♪

先生やっててて本当に嬉し～～～～～～～～～ッッい♪♪♪♪♪」